

〈第148回定期演奏会〉

Program Note

曲目解説「演奏をより深く楽しむために」

音楽評論・東条碩夫


モーツァルト：フルートとハープのための協奏曲

初演：不詳

八長調 K.299(297c) (オーボエとハープ版)

ユニークな楽器の組み合わせによる名作協奏曲

モーツァルトが作曲したソロ楽器とオーケストラのための「協奏曲」は、全部でおよそ50曲にもものぼるとされる。その半分以上は、彼が自ら名手でもあったピアノのための協奏曲なのだが、その他にもヴァイオリン、ホルン、フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴットなどをそれぞれソロ楽器とした協奏曲も書かれている。だが、ここに聴くフルート（今日は特別にオーボエが吹く）とハープをソロとした協奏曲は、その楽器の組み合わせのユニークさから、特別な存在であると言っていいだろう。

作曲されたのは、1778年（モーツァルト21歳）の4月頃とみられている。当時彼はパリに滞在していたが、あるきっかけで外交官の貴族ド・ギーヌ公爵に紹介され、その娘に作曲を教える仕事を引き受けた。ただしその娘は、作曲の勉強に関しては——モーツァルトが父親宛に書いた手紙によれば——「どうしようもなく頭が悪くて、しかも生来の怠け者です」という状態だったらしい。だが父親のギーヌ公はフルートを得意とし、娘の方はハープが上手だったので、モーツァルトはその父娘の依頼に応じ、この「フルートとハープのための協奏曲」を書いたのだった。

しかし、これほどの素晴らしい作品を受け取っておきながら、けちなギーヌ公は作品への謝礼と作曲レッスン（24回も！）料を含め、モーツァルトに雀の涙程度の謝礼金しか払おうとしなかったらしい。モーツァルトはかんかんに怒り、

それを受け取るのを拒否した、という話が伝わっている。そのようなわけで、この曲がいつ初演されたのかさえ定かでないのである。

際立つ美しい音色、快活な曲想

曲は3つの楽章からなる。全曲にわたり優美で壮麗で、特にそのフルートとハープが相和する優雅な音色と、それらが爽やかなオーケストラの響きと溶け合っていく美しさは、モーツァルトの全作品の中でも際立ったものであろう。モーツァルトはもともとフルートという楽器にはさほど興味を持たなかったと伝えられ、またハープも当時は未だ半音処理の難しい不完全な楽器だったというが、それにもかかわらずこの曲のような見事な協奏曲を仕上げたモーツァルトの天才ぶりには、ただもう感嘆するほかはない。今回はフルートのパートをオーボエが演奏する編曲版なので、イメージもかなり異なって来るはずだが、しかしその美しさは少しも変わらないはずである。そして、ハープの華麗な躍動も素晴らしい。

第1楽章はアレグロ（快速に）。八長調の晴れ晴れとした主題による開始部からして魅力的だろう。第2楽章はアンダンティーノ（ゆっくりと）で、その美しい旋律はとりわけ人気が高い。そして第3楽章は再びアレグロで、ロンド形式による快活な曲想となる。

楽器編成

オーボエ独奏、ハープ独奏、オーボエ2、ホルン2、弦楽5部

作曲家プロフィール


ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart 1756-1791

ザルツブルクに生れ、ウィーンで没した史上最高の作曲家のひとり。幼年時代から天才音楽家として作曲と演奏に稀代の才能を発揮、多くの名作を生み、父親の指示で欧州各地へ演奏活動の環を拡げた。その幼時からの旅の多さが彼の健康を害し、夭折の原因になったのではないとも言われる。前述のバリ滞在中には、同行していた母を7月に病のため喪うという不運にも遭った。この旅の後間もなく、彼は故郷ザルツブルクと訣別することになる。

ベートーヴェン:交響曲 第5番 八短調 op.67

初演:1808年12月22日 ウィーン

「運命」という副題の謂われは、あまりあてにならない

文豪ゲーテが、このベートーヴェンの「第5交響曲」の第1楽章を、知人にピアノで弾いてもらった時の話が伝わっている。ゲーテはそれを聴いて、家が崩れるのではないかと思ったほどの衝撃を受けたそうである。そして、聴き終ったあとでもしばらくぶつぶつと「大変な曲だ……大変な曲だこれは……」と呟いていたという。

その話が正確かどうかはともかく、当時の音楽を聴き慣れていた人の感性にとっては、たとえそれがオーケストラによる演奏ではなく、ピアノ1台で演奏されたにしても、その衝撃は大きかったと思われる。ゲーテはおそらく、なによりもこの曲の並外れた強靱な力に圧倒されたのだろう。たしかに、これほど凄まじい迫力を持った音楽を19世紀初頭に書くことのできた作曲家は、ベートーヴェン以外にはいなかったはずである。

「第5交響曲」は、1808年に完成された。本格的な作曲の時期は前年からだが、「第3交響曲《英雄》」完成(1804年)の頃にはすでにスケッチが開始されていたようだ。いずれにせよそれは、文豪ロマン・ロランが「傑作の森」と呼んだ時期——1803年あたりから1809年あたりまでの、ベートーヴェン30歳代、創作力が絶頂期にあった時期に当たっていた。この「第5交響曲」のほぼ同時期には、「第6交響曲《田園》」や、「ピアノ・ソナタ《熱情》」、「ラズモフスキー弦楽四重奏曲集」、「序曲《コリオラン》」、「ピアノ協奏曲第4番」などの名作も作曲されていたのであり、まさに目も眩むような旺盛な創作力といって過言ではない。

なお、この曲に付されている「運命」という副題は、第1楽章冒頭の有名なモチーフについて、ベートーヴェン自身が「運命はこのように扉をたたくのだ」と弟子のシントラーに語ったということから生まれたものだが、最近の研究によれば、この話はあまり信憑性がないとされている(「運命」という題名を使用しているのは日本だけのようである)。

短いリズム動機が全曲を統一する驚異的な手法

第1楽章の冒頭は、古今あらゆる交響曲の中でも、最もよく知られたものである。序奏なしでいきなりたたきつけられる有名な第1主題は、僅か4つの音符からなる実に簡単なモチーフが基本になっている。このリズム動機が怒涛のように反復され、展開され、楽章全体がひとつのイメージで統一されて行くさまは、まさに圧巻というべきであろう。これほど有機的に、しかも緊迫感を以て統一された楽章は、ベートーヴェン以前には聴かれないものだった。

しかもベートーヴェンは、このリズムを、第1楽章だけでなく、この交響曲全体を統一するモチーフとして活用しているのである。第2楽章の2つの主題の中にも、このリズム動機が含まれている。また第3楽章では最初からこのリズム動機が主題として登場、ホルンにより朗々と奏され、それ以降にも随所にこのリズムが現れる。

第3楽章の最後は、最弱音による神秘的な曲想になり、その中にティンパニがリズム動機を微かに響かせるうちに、ヴァイオリンが上へ上へと動きつつ、ついに猛然とクレッシェンドして最強奏の第4楽章へ突入する。この部分での劇的な移行も、ベートーヴェンにして初めてなし得た手法であった。この第4楽章は、まさに勝利感に満ちた歓呼の音楽で、「苦悩を克服しての歓喜」というにふさわしいものと言えよう。この楽章でも、例えば第2主題などに、あのリズム動機が使われているのである。そして、再現部の直前には第3楽章の最後の部分が回想されるという——これもベートーヴェンの新機軸であった。

楽器編成

フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、コントラバスーン、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部

作曲家プロフィール



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

Ludwig van Beethoven 1770-1827

ボンに生れ、ウィーンで没した史上最高の作曲家のひとり。16歳の時ウィーンに旅行、モーツァルトを訪ねて即興演奏を聴かせたことがある。21歳でウィーンに移住、数年後に耳の痺疾に襲われたが、その苦悩を克服して不滅の名作を数多く生み出した。「傑作の森」の後、1810年代後半には親族との争いもあって一時期創作力は低下したが、やがて不死鳥のごとく復活し、「第9交響曲」や「ミサ・ソレムニス」などの高みに到達して行く。